

幼児の園生活におけるレジリエンス

—— 尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討 ——

高 辻 千 恵¹

幼児期の日常的な園生活における保育者評定用レジリエンス尺度を作成し、その構成と信頼性・妥当性について検討した。保育場面への参与観察の記録から抽出した幼児の日常的ストレスサーについて、保育実践経験者に質問紙調査を実施し、頻度・不快さの程度ともに高いと評定されたストレス場面をもとに、レジリエンス尺度を作成した。これについて幼稚園・保育園の年長児及び年中児計289名を対象に保育者による評定を求め、その α 係数・再テスト信頼性係数を算出したところ十分な値が得られ、また因子分析の結果から尺度の一因子性の高さが示された。また、同一児に関する複数の担任による保育者評定から評定者間の安定性が示された。さらに、保育者評定の得られた幼児の一部に対しソシオメトリック・テスト、及び2つの対人葛藤場面でのストレス認識度とドールプレイによるストーリーの展開を求めたところ、保育者による評定とソシオメトリック・テストにおける被指名者数、約束を破られた場面におけるストレス認識度、ストーリー展開をレジリエンスの観点から評定した反応得点との間に関連が見られ、尺度の妥当性が示された。

キーワード：レジリエンス、幼児の日常的ストレス、社会的スキルの柔軟な利用、対人葛藤場面

問題と目的

保育園や幼稚園などにおける同年代の集団の中で友達関係を形成し、さらにそれを維持していくということは、幼児期の子どもにとって重要な発達課題のひとつであると同時に、様々なストレスを日常的に経験するストレスサーにもなりうるものである。

子どもの主なストレスサーは、日常生活における普遍的で発達の意味を持つもの（仲間はずれ・学業成績など）と、非日常的でトラウマティックな経験からおこるもの（虐待・病気・災害など）の二種類に分けられるとされる（Ryan-Wenger, Sharrer, & Wynd, 2000）。こうしたストレスサーについて Lewis, Siegel, & Lewis (1984) は、「不快、不安、心配」だと感じる出来事として、大人はたいいてい家族に関係した非常に不幸な出来事を挙げるのに対し、子どもは親・学校・仲間・自分に関する日常的な出来事を挙げることを指摘している。また、青年期では同性との関係に最も強くストレスを感じるが、児童期では同性の仲間関係でのトラブルに強いストレスを感じる傾向があるという知見も示されている（Berk, 1997）。

これら一連の先行研究から、ストレスサーは心身の発達段階と緊密に関係しており、特に子どもにとっては、さらされる機会の多い日常の仲間関係におけるス

トレスの影響は非常に大きいと考えられる。しかし、子どものストレスを扱ったこれまでの研究では、非日常的なストレス（e.g. O'Connor, Rutter, Beckett, Keaveney, & Kreppner, 2000）や児童期以降（e.g. 長根, 1991）を対象としたものは多いが、幼児期の日常的なストレスに関するものは未だ少ない（Sullivan, Saylor, & Foster, 1991）。現在、就学前期の幼児の大半は幼稚園・保育園での生活を経験しており、特に保育園児の中には家庭よりも園で過ごす時間のほうが長い子どももいる。こうした状況の中、園で育まれる仲間関係の社会的発達における重要性を考えると、園での仲間関係に関する幼児の日常的ストレスは、より検討されるべき課題と言える。

また、日常的な環境は、そのコミュニティの文化と密接な関係をもつ。従って、幼児の日常的ストレスの研究にあたっても、その内容はわが国独自の保育環境や文化に即していることが必要であろう。

以上より、本研究では園での仲間関係を中心とする幼児の日常的ストレスを対象とする。そして、そうしたストレスに対しより適応的に振る舞うことができる、すなわち「抵抗力のある」子どもの特徴を示す概念としてレジリエンス（resilience）に注目し、保育者評定を用いてその検討を試みることを目的とする。

レジリエンスとは、「その状況（特にストレスフルな場面）で要求されることに柔軟に反応する傾向」（Asendorpf & van Aken, 1999）などと定義され、対人状況における柔

¹ 東京大学大学院教育学研究科 takatsuj@p.u-tokyo.ac.jp

軟性を中核とした概念である。さらに広義には、ストレスに関するネガティブな結果を導きやすくするようなりリスク要因 (Howard, Dryden, & Johnson, 1999) に対し、「それが存在しない場合と同じかそれ以上に良い結果を生み出すよう作用するプロセス」(Cowan, Cowan, & Schulz, 1996)として、個人の内的な性格特性としてだけでなく、個々のおかれた環境への適応プロセス全体も含めて包括的に捉えられている。

レジリエンスは、従来虐待や貧困など深刻な逆境へのコーピングという文脈で検討されることが多かった。しかし最近では、レジリエンスが個人の日常生活に果たす役割についても検討する意義があることが指摘され (Klohn, 1996)、研究対象となる領域は教育の分野などにも拡大しつつある。高辻 (2000) は幼稚園児を対象とする研究で、レジリエンスの中核をなすと考えられる行動の柔軟性は、幼児の自己制御機能の構成要因である「自己主張」及び「自己抑制」(柏木, 1988) とは独自の側面として保育者から捉えられており、また友達関係を中心とした適応的な園生活とも関連が見られるという知見を得ている。こうした結果からも、幼児期の仲間関係にレジリエンスの観点をより積極的に適用する意義が示唆されていると言えよう。

しかし一方で、レジリエンスという用語は定義が非常に漠然としており、研究によって多様かつ曖昧なまま用いられているという問題がある (Cowan et al., 1996)。近年こうした概念の多様性による実像の捉えにくさへの批判とともに、レジリエンスの理論や研究の厳密さに対する関心が高まってきており (Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000)、概念そのものをより理論的に検討する必要性も指摘されている (Klohn, 1996)。

よってレジリエンスという概念の内容については、研究の対象となる発達段階や場面にあわせ、改めて精緻化した上で実証的な研究に適用されるべきであると考えられる。

ところで、これまでのレジリエンス研究は、主にストレスと社会的コンピテンス (社会的スキルの上位概念 (柴田, 1995)) というふたつの構成概念を中心に進められてきたとされる (Luthar & Zigler, 1991)。レジリエンスの評定項目を因子分析した結果においても、古賀・山崎 (2000) では「促進的環境」に加えて個人の特性として「内的・個人的強さ」と「スキルやコンピテンス」の3因子が、また Klohn (1996) では「自信のある楽観主義」「対人的な暖かさと洞察」と「熟達した表現」「生産的で自律的な行動」の4因子が挙げられている。これらをふまえれば、レジリエンスの環境的な要因を除いた

内的な部分は、「社会的スキルの柔軟な利用」として行動に現れる側面と「ストレス場面に対する耐性 (強さ)」として状況に対する内的な側面から捉えられるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では幼児にとってストレスフルと思われる対人場面での内面や行動の柔軟さをレジリエンスとして捉えた上で、保育者評定用のレジリエンス尺度の構成を試み、これを保育の場で用いる上での有用性や問題点を検討する。

先行研究で主に用いられているレジリエンス尺度 (e.g. Eisenberg, Guthrie, Fabes, Reiser, Murphy, Holgren, Maszk, & Losoya, 1997) は、Q-sort をもとに作成されているため一般的な性格特性の特徴について記述した項目内容 (「自分に自信がある」など) が多く、対象者の発達段階や問題とするストレス場面についてはあまり具体的に触れられていない。そのため現場の保育実践者が評定者となる場合には、実際の場面に適用しにくく、安定した評定が難しいという問題もある。従って、対象ごとにより実証的な研究を進めていくには、発達段階や場面をある程度特定した上で、それに応じてより明確化した項目を用いることが必要と考えられる。

こうした問題をふまえて、本研究では幼児の日常的な園生活に即したストレス場面を想定しうる内容の項目を作成するものとする。

そこで、まず具体的に園生活のどのような場面が子どもにとってストレスとなりうるのかを規定する必要があるが、わが国における幼児の園生活での日常的なストレスサーについては、先行研究が少なく未だ十分に規定されていない。堀池・富田・村田・久保 (1999) では、保育者や保護者に園生活全般におけるストレス場面を想起するよう求めた自由記述をもとにストレスサー項目を作成しているが、友達との関わりからストレスが生じる場面については3項目と少ないため、本研究ではさらに具体的で詳細な場面を得る必要がある。そのため研究Ⅰとして、保育場面の参与観察によりストレス場面を収集してストレスサー項目を作成する。さらに、それをもとに複数の園の保育者に質問紙調査を行い、そうした場面が園生活で日常的に見られるものなのか、また保育者にどの程度ストレスフルなものとして捉えられているのか検討する。

その上で、研究Ⅱでは、研究Ⅰで保育者に頻度・不快さの程度ともに高いと評定されたストレス場面を中心に引き上げ、そうした場面を背景にレジリエンスの個人差が測定できるような項目を作成し、その信頼性の検討及び妥当性の予備的な検討を行う。

また、尺度の構成について、前述した「社会的スキルの柔軟な利用」「ストレス場面に対する耐性」の二側面から捉えることが可能であった場合、各側面に対する保育者の捉え方の特徴についても検討を加える。

さらに研究IIIでは、対象となる幼児本人に面接を行い、社会的適応測度としてのソシオメトリック・テストの結果と、仮想の社会的課題場面に対するストレスの認識度と対処の仕方について、レジリエンスの観点から評定した結果との関連をみることにより、研究IIで作成した尺度の妥当性をより詳細に検討する。

研究 I

手続き 都内のF保育園年長児クラス(5~6歳)19名(男児12名、女児7名)を対象として、1999年4月~2000年3月の1年間にわたり月1~2日程度、保育場面の参与観察を行った。その結果得られた観察記録より、幼児がストレスを感じていると考えられる場面を抜き出した上で、それが他の複数の園でも同じように見られるか、また保育者によりどれくらいストレスフルなものとして認知されているかという点について検討するため、首都圏の保育実践経験者35名(計29園/いずれも女性)を対象に質問紙調査を実施した。なお、回答者の保育実践の経験年数は平均6.5年(1ヶ月~25年)であった。

質問紙の内容 観察記録をもとに、幼児の園での友達関係を中心とする日常的ストレス場面項目(29項目)を作成し、これについて、「日常でどれくらい見られるか(頻度)」を「ほとんどない」~「非常に多い」、また「どれくらい子どもにとって不快と思われるか(不快さの程度)」を「全く不快でない」~「非常に不快」の5件法で訊ねた。回答にあたっては、特定の子どもを想定するのではなく、一般的な傾向として回答するよう指示した。

結果 幼児の日常的ストレス場面の頻度及び不快さの程度についてTABLE 1に示した。この結果から、「友達に乱暴される」「みんなから自分のルール違反を指摘・非難される」など頻度・不快さの程度ともに高い値の得られた項目について、観察で得たストレス場面がある程度他の園でも共通してよく見られ、また保育者からストレスフルと認識されていることが確認できたと考え、研究IIのレジリエンス尺度のストレス場面を前提とする項目で用いるものとした。

研究 II

対象者・回答者 東京都・神奈川県・茨城県の保育園及び幼稚園(A~E園の5園)の年中児6クラス(4~5歳)129名(男児71名、女児58名)、年長児6クラス(5~6歳)160

TABLE 1 ストレッサー項目 平均値と標準偏差(5件法 括弧内は標準偏差)

項 目	頻度	不快さの程度
22. 友達とけんかする	3.41(0.91)	3.75(0.84)
18. 友達との競争で負ける	3.06(0.67)	3.38(0.87)
23. 主張の強い友達の意見に押されて、自分の主張ができない	3.03(0.93)	3.45(0.89)
27. みんなから自分のルール違反を指摘・非難される	2.91(0.96)	3.75(0.95)
10. 遊びや活動の仲間に自分から入れない	2.90(0.10)	3.56(0.88)
17. 友達に自分が遊んでいるおもちゃや遊び相手を奪われる	2.87(1.20)	4.03(0.86)
28. 自分の失敗などを先生に言いつけられる	2.81(0.10)	3.81(0.97)
21. 自分の意見や注意を相手に聞いてもらえない	2.81(0.86)	3.71(0.64)
26. 注意した友達に言い返される	2.81(1.03)	3.47(0.67)
6. 友達に自分の間違いを指摘される	2.69(1.03)	3.41(0.80)
25. 友達のルール違反や当番の仕事の遅れが気になる	2.61(0.99)	3.06(0.76)
5. 友達に「~しろよ」などと厳しく命令される	2.59(1.16)	3.75(0.88)
1. 絵や作品を作るとき他の子より遅れたり、うまくできない	2.59(0.80)	3.29(1.10)
3. 遊びや活動の最中友達に文句を言われたりせかされたりする	2.56(0.95)	3.75(0.76)
20. クラスの係・役決めで、なりたいたいものになれない	2.56(0.98)	3.39(0.72)
14. 友達に遊びの誘いを断られる	2.53(1.02)	3.84(0.85)
15. 友達に乱暴される(たたかれる、蹴られるなど)	2.47(1.34)	4.59(0.56)
24. 遊びや当番活動でまわりの友達が自分の指示どおりにうごかない	2.47(0.92)	3.31(0.69)
11. 一緒に遊んでいる友達が他へ行ってしまい、一人取り残される	2.34(1.04)	3.72(1.22)
4. 友達にいやなこと・気にしていることを言われる	2.22(1.10)	4.44(0.50)
16. 友達につくったものをこわされる	2.19(0.82)	4.31(0.74)
2. 失敗したとき友達に笑われたりからかわれたりする	2.19(1.06)	4.19(0.69)
12. 友達から仲間外れにされる	2.13(1.07)	4.56(0.67)
19. 「やーい負けたー」など友達に負けたことを強調される	2.13(1.07)	4.28(0.73)
7. 友達が目の前で内緒話を始める	2.13(1.16)	4.13(0.66)
9. 遊びや活動のとき友達が自分と同じ組になることをいやがる	2.03(1.03)	4.28(0.73)
29. 自分が悪くないのに自分のせいにされてしまう	1.94(0.91)	4.41(1.04)
8. 友達に言いたくないことをわざと聞かれる	1.63(0.87)	3.88(0.55)
13. 友達から無視される	1.47(0.67)	4.72(0.46)

名(男児84名、女児76名)を対象とし、各園の保育者に質問紙への回答を求めた。A・B・C・E園では各クラスの担任(複数いる場合は別々に回答)11名(いずれも女性)、またD園では園長1名が評定を行った。さらにB園では、対象児の担任ではないが日常的に接する機会が多い保育者(他クラスの担任及び非常勤で担任を持たない保育者)4名にも年長児クラスの幼児について回答を求めた。

調査実施期間 2000年11月上旬~下旬

再テスト 再テスト信頼性の検討のため、年中児クラスと年長児クラスのうちそれぞれ1クラスずつに対して、1回目の質問紙調査の2週間~1ヶ月後に同じ内容の質問紙調査を実施した。実施期間は2000年12月上旬~中旬であり、回答者は各クラス担任である。

質問紙の内容

①レジリエンス尺度(24項目)

CCQ(California Child Q-sort)を用いたEisenberg et al.(1997)、CAQ(California Adult Q-Sort)を用いたKlohn-en(1996)、及び小花和(1999)のレジリエンス項目、ego-resiliency scale(ER89)(Block & Kremen, 1996)を参考とし、これらから内容的に重複する項目、日本の園生活を対象とする上で不適切と思われる項目などを削除した。その上で、項目の内容を、ストレス場面を

前提としたものについては研究Ⅰで評定値が高かったストレッサー項目を用い、また特にストレス場面に限定していないものについては観察で見られた行動や活動を基にして、保育場面に即した具体的な表現に改め、幼児の園生活におけるレジリエンス項目を作成した。

例：従来の項目「あきらめやすい（反転項目）」

→「友達におもちゃをとられたとき、あまり落ち込まずすぐに別の遊びを始める」

従来の項目「同情的である」

→「友達が困っているときや泣いているとき、なぐさめたり手を貸してあげる」

②園生活への適応尺度（5項目）

①で作成したレジリエンス尺度と仲間関係を中心とした園生活への適応との関連を見ることにより尺度の妥当性を予備的に検討することを目的として、木村・藤崎（2000）の幼稚園・保育園への適応尺度を参考に、「園での一日を楽しそうにすごしている」「ひとりでぼつんといることがある（反転項目）」「仲の良い友達がたくさんいる」「登園後の朝の支度がスムーズにできる」「友達との遊びに積極的に参加している」の5項目からなる園生活への適応に関する尺度を作成した。

実施手続き ①と②の項目をあわせて質問紙（計29項目）を作成し、回答者のもとに2週間～3週間程度留め置き、「よくあてはまる」～「まったくあてはまらない」までの4件法で回答を求めた。

結果

項目の選択と尺度の構成 保育者別に各項目の平均値と標準偏差を求めたところ、標準偏差が0、すなわち全ての幼児について同じ評定をしている保育者が6人いた1項目について、保育者評定を求めるのには不適切な項目と判断し、削除した。

また、項目一全体相関を求めたところ、概ね.31～.62という値が得られたが、相関係数が.15と低かった1項目を削除した。

さらに、主因子法による因子分析を行ったところ、第1因子の固有値は5.81であり、尺度の1因子性が確かめられた。但し第2因子の固有値が1.32であったため、最小二乗法プロマックス回転による探索的な因子分析を行った。その結果、共通性と因子負荷の値などを参考にさらに3項目削除した上で因子数を2因子とした場合も、因子間相関は高いもののある程度解釈可能と考えられる結果が得られた（TABLE 2）。この各因子に含まれる項目の場面的な特徴から、先行研究における構成要因と対応しうると判断して、第1因子（14項目）を「社会的スキルの柔軟な利用」、第2因子（5項目）を

TABLE 2 レジリエンス尺度の因子分析結果（最小二乗解をプロマックス回転したもの）

項 目	因子パターン		
	F1	F2	共通性
2. 自分のやり遂げた事（例：運動・行事での役割）や作品・絵などに自信がもてる	.80	-.14	.57
13. 遊びや当番の仕事をすると、活発に動く	.67	-.02	.44
3. 友達が困っているときや泣いているとき、なぐさめたり手を貸したりしてあげる	.63	-.26	.39
17. 友達にたたかれるなど乱暴なことをされたとき、その出来事やいきさつについて正直に語ることができる	.63	-.05	.37
24. ひとつの活動や遊びに集中して取り組み、最後までやりとげる	.63	-.09	.35
5. 友達と遊具の取り合いなどのトラブルがあったとき、自分自身でなんらかの解決方法を考える	.62	.12	.47
22. 今まで経験したことのない行事や遊びでもためらわずにすぐに入り込む	.58	.09	.39
16. おもちゃを工夫して使ったり、遊びのルールを自分で作り出すなど、物事の見方が創造的である	.57	-.05	.30
12. 鉄棒や跳び箱などあふないと思われる活動にも失敗を恐れずに取り組む	.51	.18	.38
21. 自分ひとりでできないことがあるとき、友達に声をかけて助けを求める	.45	.03	.22
4. 友達から間違いやルール違反を指摘されたときに、状況に応じて自分の行動を変えられる	.45	.29	.40
23. 行事（及びその練習）や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる	.42	.17	.27
15. 面白いことを言ったりやったりして、友達を笑わせようとする	.41	.12	.21
7. 新しい友達や保育者に対して、自分から積極的に近づき、親しくなろうとする	.40	.17	.25
9. 友達におもちゃをとられたとき、あまり落ち込まずすぐに別の遊びを始める	.10	.75	.51
10. 遊んでいた相手が別の遊びにいつまでも、すぐにまた違う友達と遊ぶ	.02	.69	.47
8. 友達に嫌なことを言われても、それほど気にしない	.05	.57	.30
11. 叱られて泣いても、しばらくするとふだんの様子にもどる	.15	.46	.30
14. つくったものを友達にこわされたとき、怒ってもすぐに落ちついて新しく作り直し始めることができる	.36	.41	.42
因子寄与 因子間相関	3.70	1.59	0.45

反転項目（項目 23）については反転後の値を用いた結果を表す
因子寄与は他の因子の影響を除いたもの

「ストレス耐性」とし、レジリエンス尺度の下位尺度として補足的に検討を加えることとした。

尺度の信頼性 5つの項目を削除した後の尺度（以後、これをレジリエンス尺度とする）について、クロンバックの α 係数を求めたところ、.885という値を示し、十分な一貫性が確かめられた。また、下位尺度の α 係数についても、社会的スキルの柔軟な利用が.876、ストレス耐性が.752という値を得て、内的一貫性が確かめられた。なお、レジリエンス尺度と2つの下位尺度について、それぞれ反転項目を反転後すべて合計した合成得点を各尺度得点とした。下位尺度間の相関は、.50($p < .001$)であった。

レジリエンス尺度と下位尺度について、2回分の評定が得られたクラスにおける1回目と2回目の尺度得点間の相関係数を算出し、再テスト信頼性係数及びその95%信頼区間を求めた（TABLE 3）。また、各尺度得点の保育者間相関（TABLE 4）については、クラス担任同士が評定しているもの（①・②）については、①のストレス耐性の下位尺度が.336と有意ではなかったものの、その他については.529～.845と概ね高い正の相関が認められた。また、クラス担任以外による評定を行っているB園5歳児クラス（③～⑥）については、担任同士

の場合よりも相関係数が低い傾向が見られ、特に、ストレス耐性の下位尺度で相関係数が低かった。

各尺度得点と適応尺度得点間の相関 各尺度得点について、園生活への適応尺度の5項目を合計した合成得点との相関係数を求めた(TABLE 5)。なお、相関係数の算出にあたっては、クラスの状況や各保育者の個人差を考慮して、評定値はクラス毎に標準化した。

レジリエンス及びその下位尺度と園生活への適応尺度との間には、.313～.582とある程度高い相関が見られた。しかし、同一の保育者による評定であることから保育者の要因も大きいと考えられ、妥当性の検討には保育者以外による評定、あるいは面接など別の方法による評定を用いたさらなる検証が必要と言える。

研究 III

対象者 研究IIで作成したレジリエンス尺度の妥当性を多角的に検討するために、研究IIで対象とした5園のうちA・Bの2園における年中児2クラス33名(男児18名,女児15名)・年長児2クラス43名(男児23名,女児20名)の計81名に対し、個別の面接による調査を実施し

TABLE 3 再テスト信頼性係数

①E園4歳児クラス(担任)

信頼性係数 (95%信頼区間)		
レジリエンス尺度得点	.86***	[.93, .73]
社会的スキルの柔軟な利用尺度得点	.92***	[.96, .83]
ストレス耐性尺度得点	.57***	[.77, .27]

②B園5歳児クラス(担任)

信頼性係数 (95%信頼区間)		
レジリエンス尺度得点	.67***	[.85, .37]
社会的スキルの柔軟な利用尺度得点	.66***	[.84, .34]
ストレス耐性尺度得点	.52**	[.76, .14]

p<.01 *p<.001

TABLE 4 尺度得点の保育者間相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥
レジリエンス尺度得点	.78***	.59**	.53**	.43*	.05	.48*
社会的スキルの柔軟な利用尺度得点	.85***	.53*	.55**	.61**	.02	.59*
ストレス耐性尺度得点	.34	.55*	.22	-.04	-.34	-.16

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

①C園4歳児bクラス(担任同士)

②A園5歳児クラス(担任同士)

③B園5歳児クラス(担任と0歳児クラス担任)

④B園5歳児クラス(担任と非常勤のフリー保育者(受け持ちクラス不特定))

⑤B園5歳児クラス(担任と3歳児クラス担任)

⑥B園5歳児クラス(担任と4歳児クラス担任)

TABLE 5 各尺度得点と適応尺度の相関

	園生活への適応尺度
レジリエンス尺度得点	.57***
社会的スキルの柔軟な利用尺度得点	.58***
ストレス耐性尺度得点	.31***

***p<.001

た。但し、対象児のうち5名(年中男児1名,女児2名/年長男児1名,女児1名)は調査時に欠席していたため、ソシオメトリック・テストにおける指名対象にのみ含まれるものとした。

調査実施期間 2000年11月上旬～中旬

手続き 両園とも、自由遊びの時間に職員室の一角に園児を一人ずつ誘導してきた後、あいさつ、氏名とクラスの確認、簡単な説明をした上で、ソシオメトリック・テスト、対人葛藤場面の提示、質問の順で面接を行った。所要時間は一人あたり約10～15分であった。

①ソシオメトリック・テスト

「□□組(対象児のクラス)のお友達の中で、一番の仲良しは誰ですか?」「他に仲良しのお友達はいますか?」と質問し、同じクラスの幼児を3名まで指名させた。3名以上挙げた場合には、最初の3名をデータとして使用した。

②葛藤場面の提示

観察記録及び先行研究(山本,1995)を参考に、対人葛藤が引き起こされると考えられる以下の2種類のストーリーを作成し、これを紙芝居(B4版;男児用・女児用)で提示した。その際、より状況を現実に近いものとして考えやすくするため主人公は対象児本人とし、登場人物は親密さを同程度に想定するようソシオメトリック・テストで挙げられた友達とした。

また、場面の内容を考慮し、実験者が「お友達も本当は一緒に遊びたかったの。握手して仲直りしてくれる?」と申し出る形で各場面を終了した。対象児がなおも不快感を示した場合には、実験を中断して一緒に話をしたり遊んだりする処置をとった。

場面Ⅰ(友達に約束を破られる)

「○○ちゃん(対象児名)は、お友達の△△ちゃんと一緒に遊んでいました。『そうだ、おもちゃをとってくるから、それで一緒に遊ぼうよ』『いいよ、まってるね』○○ちゃんは、おもちゃをとりに行きました(図版1)。ところが、帰ってくると、△△ちゃんは他のお友達と楽しそうに遊んでいました。『あれー、まっててって言ったのになあ』(図版2)」

場面Ⅱ(友達にシャベルを取られる)

「○○ちゃん(対象児名)は、お砂場でシャベルを使って大きな穴を掘って遊んでいます(図版1)。『そうだ、お水を入れよう』○○ちゃんは立ち上がって、バケツを取り、お水を汲みに行きました。ところが、○○ちゃんがお水を汲んで帰ってくると、お友達(場面Ⅰと同じ友達)が○○ちゃんのシャベルを使っています。○○ちゃんは遊べなくなりました(図版2)。」

③質問

②の各ストーリーを提示した後、それぞれ以下の質問を行った。

ストレス認識度（場面に対する不快感の程度）

対象児に4段階の大きさの丸マークを提示し、「○○ちゃんは、この時どれくらい嫌な気持ちですか？この中から選んで下さい。丸が大きいほど嫌な気持ちがするという意味です」と教示して選択させた。

場面への反応

レジリエンスという観点においては、単に葛藤場面に対してどのような反応や方略をとる傾向があるかということだけではなく、相手の反応をどのように予測するかということも場面に対して感じるストレスと関わると考えられることから、本研究ではMSSB (The MacArthur Story Stem Battery) (Bretherton, Ridgeway, & Cassidy, 1990) を参考にし、本人及び相手役の複数の人形を幼児に操作させて話を展開させるドールプレイの形式をとった。「○○ちゃんだったらこの後どうするかな？このお話の続きをお人形さんで作ってみましょう」と教示して、ストーリーの続きを実演させた。

結果

プロトコルの評価 実演による対人葛藤場面への反応について、ビデオ撮影（B園のみ）及びテープレコーダーによる録音からプロトコルを作成した。各場面のプロトコルについて、教育心理学専攻の大学院生1名（対象児に関して性別以外の事前情報は与えなかった）と別々に初出反応のカテゴリー分類を行い、それをもとにストーリー展開を評価した。

①初出反応のカテゴリー分類：東・野辺地（1992）などの社会的スキルの分類を参考に、各場面に対する初出反応を、以下のように分類した。

- 1 他者依存的解決方略（先生、母親、姉に言う）
- 2 向社会的解決方略（一緒に遊ぶ・頼む・約束する）
- 3 反社会的解決方略（たたく・脅す・けんかする）
- 4 葛藤回避方略（泣く・諦める・家に帰る・待つ）
- 5 消極的反応（何もしない・わからない）
- 6 不快な感情の表現（悲しい・嫌な気持ちがする）
- 7 非現実的解決方略（警察に逮捕してもらう・刺す）

②ストーリー展開：社会的コンピテンス・スキル研究においては、対人葛藤場面への反応について、その有効性や社会性（向社会的・反社会的など）といった点から評価するものが多く、ストーリー全体の展開という観点からの評価はあまりなされていない。しかし、レジリエンスがストレス耐性という内的な側面を含むと考え、行動内容の評価だけではなく、より内面につい

ても考慮した評価基準が必要と考えられる。そこで、レジリエンスの観点におけるストーリー展開の評価基準を設定する試みとして、各場面での実演反応のプロトコル全体から、場面へのストレスをどの程度感じていると見られるか、また①で分類されたどのカテゴリーの社会的スキルを用いているかという2点について、以下の基準によりコード化を行った。

- 1 強いストレスを感じているものの、解決法を提示しない。
- 2 強いストレスを感じて、反社会的な対応をとる
- 3 強いストレスを感じているが、自分では行動せず相手もしくは第三者に事態の解決を期待する、葛藤回避方略
- 4 強いストレスを感じて、向社会的な解決法を提案する
- 5 それほどストレスを感じることなく、解決法を提示しない
- 6 それほどストレスを感じることなく、自分では行動せず相手もしくは第三者に事態の解決を期待する、葛藤回避方略
- 7 それほどストレスを感じることなく、向社会的な解決法を提案する

評価の一致率は、カテゴリーの分類が場面Ⅰでは94.7%、場面Ⅱでは93.3%、ストーリー展開については場面Ⅰが72.0%、80.0%であった。評価者間で一致しなかったものについては、協議を経て決定した。

さらに、コード化した場面ごとのプロトコルについて、レジリエンスの観点から評価値1・2には1点（ストレスが高く、社会的スキルが未発達）、3・4・5には2点（ストレスは高いものの、社会的スキルの発達が見られる／ストレスは低い、社会的スキルは未発達）、7には3点（ストレスが低く、社会的スキルの発達が見られる）を与えて「反応得点」とした。評価値6については、向社会的解決方略ほど社会的スキルが発達しているとは見なされない（丸山, 1999）が、3の強いストレスを感じている場合と異なり、単なる他者への依存ではなく、相手へのポジティブな期待や周囲の援助を有効に利用しうる能力（Eisenberg et al., 1997）が反映された行動であると判断し、レジリエンスの観点においては評価されると考えて3点を与えた。

なお、実際にコード化を行ったところ評価値5はいずれの場面・評価者においても見られなかった。

レジリエンスの各尺度得点と被指名者数・ストレス認識度・反応得点との相関 研究Ⅱにおけるレジリエンス尺度及び下位尺度の尺度得点と、ソシオメトリッ

ク・テストにおける被指名数、対人葛藤場面へのストレス認識度、場面Ⅰ・Ⅱの反応得点の合計点との相関係数を求めた（TABLE 6）。

レジリエンス尺度と下位尺度のいずれにおいても、被指名者数との間に有意な正の相関が、また場面Ⅰのストレス認識度と有意な負の相関が得られた。一方で、場面Ⅱのストレス認識度とはほぼ無相関に近かった。

また、プロトコル評定値については、反応得点の合計点とレジリエンス及び社会的スキルの利用との間に、有意な正の相関が見られた。

TABLE 6 各尺度得点と面接調査結果の相関係数

	被指名者数	ストレス認識度 (場面Ⅰ)	ストレス認識度 (場面Ⅱ)	反応得点 (場面Ⅰ+Ⅱ)
レジリエンス尺度得点	.30**	-.27**	.03	.27*
社会的スキルの柔軟な利用尺度得点	.31***	-.24*	.02	.33**
ストレス耐性尺度得点	.23*	-.27**	.05	.11

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

考 察

尺度の信頼性と構成について 因子分析の結果、 α 係数、評定者間相関、及び再テスト信頼性係数から、本研究で作成したレジリエンス尺度については、概ね評定の安定性と内的一貫性が認められたと考えられる。

但し、2 因子の解釈を試みた結果得られた下位尺度において、ストレス耐性に関してのみ、再テスト信頼性と内的一貫性及び担任同士の評定による評定者間の安定性はある程度認められたものの、担任以外の保育者と担任の評定間に無相関あるいは負の相関が見られた。この理由のひとつに、行動的な側面から捉えやすい社会的スキルに比べると、ストレスはより内的なものであり、それを捉えるには日常的により深い関わりが求められるのではないかと考えられる。従って、この質問紙を実施するにあたっては、保育者の日常的な関わりの深さの影響について考慮する必要がある。このように、項目の前提となる場面によって保育者の立場で若干異なる様相を含むものの、2 因子の因子間相関が高いことから、尺度全体としての1 因子性は高いと考えられる。

また、保育者によっては全ての幼児・項目に高い（低い）評定値をつけたり、評定値が中心に偏りがちになる場合もある。これには保育者や園全体の主義・信条、あるいは評定に対する動機づけの低さやネガティブなイメージ・負担感などの要因が考えられる。こうした現象自体は評定尺度を用いた質問紙調査一般でしばしば見られるものの、本研究のような保育者評定の場合、

一人の評定者が複数の対象について評定するため、その影響が非常に大きくなってしまう。これは保育者評定という方法の限界でもあり、分析の際には標準化を行うなど、慎重に考慮すべき問題であろう。

妥当性について 本研究ではレジリエンス尺度の妥当性を検討するために、幼児に対しソシオメトリック・テストを実施するとともに、幼児からの指標を得る試みとして、対人葛藤場面に対するストレスの認識度と人形を用いた実演反応の評定を行った。

レジリエンス尺度とソシオメトリック・テストから得た被指名者数との間に有意な正の相関が見られたことについては、レジリエンス尺度と仲間関係を中心とした園生活への適応との関連が示されたと考えられる。また、レジリエンス尺度と対象児本人の報告したストレス認識度に有意な負の相関が見られた点については、この尺度がレジリエンスの理論的な構成概念の前提であるストレスをある程度反映していることを裏付けるものと言える。

但し、場面Ⅰにおいてはストレス認識度が高い子どもほどレジリエンスの評定値が低いという結果が見られたが、場面Ⅱではこうした関連は見られなかったことから、適切な場面設定の重要性が指摘される。場面Ⅰがより友達関係を強く反映した内容であるのに対し、場面Ⅱでは、相手が一人である点とシャベルの代替性から、友達関係についてのストレスはあまり強く認識されなかったことが可能性として考えられる。レジリエンスという観点ではストレスの程度が前提となるため、よりストレスの対象を適切に反映している場面を選ぶことが必要と考えられる。

今後の課題 従来社会的認知発達に関する研究 (e.g. 山本, 1995) では、対人交渉におけるストレスについては比較的考慮されていない。また、これまでのストレス研究においては幼児の日常的なストレスに関する研究は非常に少ないことが指摘されている (Sullivan et al., 1991; 堀池他, 1999)。幼児の日常的なレジリエンスに関する研究も未だ初期の段階ではあるが、本研究の結果から、レジリエンスという概念を用いることで、これら2 つの側面双方から幼児の社会的発達を検討する可能性が示唆されたと言えよう。

また、園生活への適応尺度との相関において、社会的スキルの柔軟な利用はストレス耐性よりも適応との関連が比較的高く、担任以外の保育者による評定でも、評定が安定しているという結果が得られた。これには下位尺度の項目数の影響もあると考えられるものの、社会的スキルはストレス耐性と比較して状況に応じ保

育者が直接指導・介入しやすい側面であるとも言える。従って、ストレスに関わる面では幼児の内的な面をより深く理解することが可能な担任独自の対応が期待される一方、対人的なスキルに関しては、担任はもちろん、それ以外の保育者でも適切な手段や表現を指導することで園生活への適応を促しうることが示唆されていると考えられる。園全体における保育者の役割に応じた関わりが幼児のレジリエンスに及ぼす効果の違いも、今後検討が必要な課題として挙げられる。

本研究ではレジリエンス尺度の保育者評定と対象児本人の対人葛藤場面への反応の評定という2つの測定の間に収束的妥当性があることが見いだされた。これをふまえて、従来必要性が指摘されていた複数の測度を用いたレジリエンスの多角的な検討 (Klohn, 1996) とともに、その共通する部分に焦点を当て、それぞれの方法で得たデータを観測変数とし共通部分を潜在変数とするような構造方程式モデルを用いた研究の可能性も期待できる。但し、対人葛藤場面に対する反応をレジリエンスの観点でどのように評価するかという問題については、規準の厳密さや従来の社会的スキル研究との相違点も含めより吟味を重ねるべきであろう。

さらに、今回扱わなかった広義のレジリエンスに含まれる環境的な要因や適応プロセス (Luthar et al., 2000) についても、今後は対象年齢を拡大した縦断調査及びより精密な観察などにより検討が必要と考えられる。

引用文献

- Asendorpf, J.B., & van Aken, M.A.G. 1999 Resilient, overcontrolled, and undercontrolled personality prototypes in childhood: Replicability, predictive power, and the trait-type issue. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 815—832.
- 東 敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究—けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス— 教育心理学研究, 40, 64—72.
- Berk, L.E. 1997 *Child development (4th ed.)*. Boston: Allyn & Bacon.
- Block, J., & Kremen, A.M. 1996 IQ and ego-resiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 349—361.
- Bretherton, I., Ridgeway, D., & Cassidy, J. 1990 Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. In M.T. Greenberg, D.Cicchetti, & E.M.Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years: Theory, research, and intervention*. Chicago: The University of Chicago Press. Pp.273—308.
- Cowan, P.A., Cowan, C.P., & Schulz, M.S. 1996 Thinking about risk and resilience in families. In E.M.Hetherington, & E.A. Blechman (Eds.), *Stress, coping, and resiliency in children and families*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1—38.
- Eisenberg, N., Guthrie, I.K., Fabes, R.A., Reiser, M., Murphy, B.C., Holgren, R., Maszk, P., & Losoya, S. 1997 The relations of regulation and emotionality to resiliency and competent social functioning in elementary school children. *Child Development*, 68, 295—311.
- 堀池美奈子・富田昌平・村田陽子・久保秀和 1999 幼児の園生活におけるストレスに関する研究 幼年教育研究年報, 21, 19—25.
- Howard, S., Dryden, J., & Johnson, B. 1999 Childhood resilience: Review and critique of literature. *Oxford Review of Education*, 25, 307—323.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 木村玲比奈・藤崎真知代 2000 幼児の社会的適応と社会的情報処理過程 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 49, 339—356.
- Klohn, E.C. 1996 Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1067—1079.
- 古賀美幸・山崎 晃 2000 幼児及び児童のレジリエンスと不安との関係に関する研究 日本発達心理学会第11回大会発表論文集, 97.
- Lewis, C.E., Siegel, J.M., & Lewis, M.A. 1984 Feeling bad: Exploring sources of distress among preadolescent children. *American Journal of Public Health*, 74, 117—122.
- Luthar, S.S., Cicchetti, D., & Becker, B. 2000 The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, 71, 543—562.

- Luthar, S.S., & Zigler, E. 1991 Vulnerability and competence : A review of research on resilience in childhood. *American Journal of Orthopsychiatry*, **61**, 6—22.
- 丸山(山本)愛子 1999 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究 教育心理学研究, **47**, 451—461.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, **39**, 182—185.
- 小花和 Wright 尚子 1999 幼児のストレス反応とレジリエンス 四條畷学園女子短期大学研究論集, **33**, 47—62.
- O'Connor, T.G., Rutter, M., Beckett, C., Keaveney, L., & Kreppner, J.M. 2000 The effects of global severe privation on cognitive competence : Extension and longitudinal follow-up. *Child Development*, **71**, 376—390.
- Ryan-Wenger, N.A., Sharrer, V.W., & Wynd, C.A. 2000 Stress, coping, and health in children. In V.H.Rice (Ed.), *Handbook of stress, coping, and health : Implications for nursing research, theory, and practice*. Thousand Oaks, CA : Sage. Pp.265—293.
- 柴田利男 1995 仲間との対人経験が幼児の社会的コンピテンスに及ぼす影響 教育心理学研究, **43**, 85—91.
- Sullivan, M.A., Saylor, C.F., & Foster, K.Y. 1991 Post-hurricane adjustment of preschoolers and their families. In S. Rachman, & T. Wilson (Eds.), *Advances in behavior research and therapy*, **13**, 163—171.
- 高辻千恵 2000 幼児の社会的行動に関連する諸要因—ego-resiliencyを中心に— 日本発達心理学会第11回大会発表論文集, 89.
- 山本愛子 1995 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について— 教育心理学研究, **43**, 42—51.

付 記

本論文は2000年度東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。研究にあたり御協力いただいた保育者・園児の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究に対し、多くの御助言と御指導をいただきました東京大学教育学部助教授田中千穂子先生・同教授南風原朝和先生に、心より感謝申し上げます。

(2001.9.21 受稿, '02.8.12 受理)

Preschool Children's Resilience in Daily Life : Creation and Validation of a Scale of Reactions to Interpersonal Conflict

CHIE TAKATSUJI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, UNIVERSITY OF TOKYO) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 427—435

The present study attempted to construct a teacher-report scale of preschool children's resilience in their daily life, including testing the reliability and validity of the scale. Stressful situations were selected on the basis of observations in a preschool, and adults with child-care experience rated the frequency and degree of displeasure of those situations. The resilience scale was constructed from situations rated as high in both frequency and degree of displeasure. Teachers rated their students ; 289 four-to five-year-old preschoolers were rated. Internal consistency reliability was determined with Cronbach's alpha coefficient, and test-retest reliability assessed with the intraclass correlation coefficient for test-retest values. Both were acceptable. Factor analyses indicated a unidimensional structure for the scale. Intraclass correlations between teachers from the same class showed stability between raters. Validity was explored through scores on a positive sociometric test and responses to interpersonal conflict situations. Significant correlations were found between scores on the resilience scale and data on 3 variables provided by the children : positive sociometric scores, degree of displeasure at a situation in which a peer broke a promise, and scores on doll play that were rated from the perspective of resilience.

Key Words : resilience, daily stress of young children, flexible use of social skills, interpersonal conflict situation, preschool children